

Title	ジョルジュ・サンドの女性思想：その両義性と現代性
Sub Title	La Pensée féministe de George Sand : ambivalence et modernité
Author	西尾, 治子(Nishio, Haruko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.54 (2012. 3) ,p.33- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20120330-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジョルジュ・サンドの女性思想

——その両義性と現代性——

西 尾 治 子

「ジョルジュ・サンドはフェミニストか」という問題は、近年、サンド研究において様々な論争を呼び起こしてきた。何がサンドをフェミニストと規定し、あるいはアンチフェミニストとする批判を呼んだのか。サンドに多大な影響を及ぼしたルソーは18世紀の科学者と同様に「性の補完論」を提唱したが、サンドもまたルソーの女性観の信奉者であり続けたのだろうか。書簡体小説『マルシーへの手紙』のほか、『ある旅人の手紙』、批評『マダム・メルランの回想記』、書簡集などのこれまでのサンド研究の射程外にあったサンドの諸作品を手掛かりに、当時の女権拡張運動と一線を画していた作家サンドのジェンダー観を考察してみたい¹⁾。

(I) 何がサンドをフェミニストと規定するのか

1.1. フェミニストという用語

フェミニストとはいったい何なのか。まず、サンドがフェミニストであったかどうかを探るにあたり、フェミニストという用語の意味を定義しておく

1) 本稿は2011年12月10日、慶應義塾大学日吉キャンパスにおいて開催された第18回「女性作家を読む」研究会（日仏女性研究学会主催、日本ジョルジュ・サンド学会、現代フランスと女性研究会共催）における筆者の口頭発表（「ジョルジュ・サンドのジェンダー思想をめぐる考察」）の原稿を加筆・修正したものである。研究会にはサンド研究者の他、法学部の学生16名、慶應義塾大通信学生、同大学外国語学校の学生らが参加した。

なくてはならないが、フェミニズム、フェミニストに関する定義は多様である。ここでは理解されやすいように、フェミニズムを「女性に不利益をもたらす性差別をなくし、女性が人間としての尊厳を侵されることのないようにするために、市民社会における女性の権利と利益を追求する政治的、哲学的、社会的思想の総体」とし、フェミニストには「フェミニズムの考え方を持つ人あるいはその実現のために実践的な活動をおこなう人」と定義づけるに留めておきたい²⁾。フェミニズムという言葉の正式な誕生はフランスでは19世紀を待たなくてはならない。ところが、フランスではそれ以前にこの言葉が表象する男女平等の思想が、歴史の中ですでに培われていた。その歴史を概観しておきたい。

フランス初の女性職業文筆家クリスティーヌ・ド・ピザンは中世の時代に聖職者ジャン・ド・マンが書いた女性蔑視の『薔薇物語』の続編（1270年頃）を痛烈に批判する『薔薇のことば』（1402年）を書き、女性を二義的な存在とみなす当時の思想潮流に一矢を報いた。魔女狩りの犠牲となって名もない多くの女性たちが苦しみ死んでいった時代を経て³⁾、17世紀にな

2) 「フェミニズム」「フェミニスト」という言葉は様々に解釈されている。「社会における女性の権利と役割の改善と進展をめざす運動家」（『ラルース事典』）「(両性の平等という論に基づいた)女の権利の主張」『オックスフォード英語辞典』（第2版）。「社会における伝統的な女性概念による束縛からの解放を唱え、女権獲得・女権拡張・男女同権を目指すフェミニズムを主張する人の事を指し、とくに女性の権利を主張する人」（Wiki）など。第一波フェミニズムは、20世紀初頭から半ば頃までの女性の参政権を主軸に据えた女性運動。第二波フェミニズムは、1960年代以降、白人中産階級の女性が推進（ポーヴォワールなど）した運動をさす。現代のフランスでは「フェミニズムとは女性の権利とその市民社会における利益を追求する政治、哲学、社会的思想である」とし、運動ではなく思想と解釈する説もある。<http://fr.wikipedia.org/wiki/F%C3%A9minisme> 2011年11月21日参照。

3) 16・17世紀の近代科学の誕生と魔女迫害の流行には間接的な関係が存在した。ミシュレは魔女にされた人々の男女比は、女性1万人に対し男性1人であったと指摘している。また、これらの女性たちは（1）土俗の信仰や呪術に関与していた女性たち（2）肉体的不遇、精神疾患その他の理由により共同体から排斥されていた女性たち（3）社会的・宗教的・政治的な集団ヒステリー

ると、男性ながら男女平等思想を提唱するデカルト主義の思想家プーラン・ド・ラ・バルが『両性平等論』を著し「知性に性の区別なし」とする自説を主張している⁴⁾。ド・ラ・バルのように男女平等の思想を提唱した男性としては、18世紀の啓蒙時代後半に登場した社会学の創始者といわれる政治哲学者のコンドルセが挙げられる。コンドルセは人口の半分を占める女性も参政権をもつ必要があるとする議論を展開したのである⁵⁾。女性の身体器官に医学的名称が初めてつけられ、医学が女性の身体を男性とは異なることを認識し、啓蒙主義哲学者のルソーやデイドロもまた科学者に倣い、後述する「性の補完論」を主張した時代であった。

18世紀末の大革命の時代には、「人権宣言」が男性形で書かれていることを指摘しすべての文言を女性形に書き直し、「女性は断頭台に上る権利があるのだから、議会の演台に上る権利もある」と主張したオランプ・ド・グージュを筆頭に、パリからヴェルサイユへ女性の行進を率いた女丈夫のテロワーニュ・ド・メリケール、革命的な女性市民クラブの指導者クレール・ラコンブ等の女性たちの活躍により女性の地位は一時的に大きく改善された⁶⁾。注目すべきは、この当時は離婚も許可されていたことであろう⁷⁾。しかし、19

により何の根拠もなく魔女に仕立て上げられた女性たち、の三種類から構成されていた。中村禎里『魔女と科学者 その他』文栄印刷、1987、pp. 6-10。

- 4) プーラン・ド・ラ・バル、『両性平等論』、佐藤和夫訳、法政大学出版局、1997。
- 5) Condorcet, *Sur l'admission des femmes au droit de cité* (1790), Tiré des *Œuvres de Condorcet* publiées par A. Condorcet O'Connor et F. Arago, Tome X. Paris: Firmin Didot Frères, 1847. 隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」——フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』名古屋大学出版会、2011。
- 6) ミシュレは女性革命家たちについて「男たちはバスチーユを占拠し、女たちは王を召し捕った」と記している(ミシュレ『革命の女たち』三宅徳嘉・山上正太郎ほか訳、河出書房、1952)。
- 7) 「革命の毒」とみなされた離婚は、1816年のボナルド法により「結婚に宗教と慣習、立憲君主制および家族の利益においてあらゆる尊厳を戻す」ために禁止された。1876年から国会議員のアルフレッド・ナケが離婚禁止を解除する法案を提出するが拒否される。明らかな過失がある場合という条件付きで

世紀に入ると事態は一変する。ナポレオン法典（1804年）が施行されるにともない、女性たちの地位は再び脅かされることになった。民法典第213条が夫婦の身分関係について「夫はその妻の保護義務を負い、妻はその夫に服従義務を負う」とし、妻の夫に対する服従・依存的地位の大原則を宣言したからであった。民法典は大革命のときには認められた女性たちの権利と自由を再び弱体化したのである。サンドの出世作『アンディヤナ』（1832）のヒロインは、まさにこの法典の犠牲者である。家長である夫に向かい、アンディヤナは叫ぶ。

私が奴隷でああなたが主人だということはわかっています。この国の法律があなを私の主人にしているのですから。（…）ですが、私から考える自由を奪うことは絶対にできはしないのです。⁸⁾

アンディヤナが女性と奴隷がおかれている状況を同一視しているように、ナポレオン法典は夫と妻の関係を雇用主と奴隷の関係に置換してしまったのである。『アンディヤナ』がベストセラーとなって多くの読者を獲得し共感を得たのは、そこにヒロインの非力が当時の法律という公の権力に巻き込まれてゆく姿が忠実に映し出されていたからであった⁹⁾。こうした状況の

ナケ法案が採択されたのは、1884年7月27日のことであった。したがって離婚ができなかったジョルジュ・サンド（1804-1876）は、1836年、夫に対し離婚訴訟ではなく別居訴訟を起こさざるをえなかったのである。

8) George Sand, *Indiana*, Classiques Garnier, 1962.

9) 弱冠28歳のサンドの処女作『アンディヤナ』は当時の出版界の常識を覆す成功作であった。ジャーナリズム（新聞王ジラルダン）の台頭以前の当時は、千部以下の発刊が常識であったが、Dupuis出版社は750部を瞬く間に完売したため、即座に400部を増刷、4ヶ月後にはさらに600部を増刷した。この小説の中では、一途な愛を拒否されるクレオール人のアンディヤナ、愛する人の子を宿しながら無残に捨てられる小間使いのヌン、荒海の中をアンディヤナを必死に追うが海の男にオールで撲殺される犬のオフェリア、三つの女の性が、白人男たちの現実的なあるいは象徴的な暴力の犠牲となって描かれており、物語の悲劇性に拍車をかけている。西尾治子「ジョルジュ・サンドの

中、サン＝シモン主義が活発な展開を見せはじめ、男女平等思想の実践的な活動が開始される。ジョルジュ・リュバンは、サンド自身もサン＝シモン主義者の集会に参加したことがあったと指摘している¹⁰⁾。1830年代初頭、アンファンタンやバザールを指導者とするサン＝シモン主義者たちはパリのメニルモンタン街で集団生活を営んでいたが、そこでは男女ともにそれぞれサン＝シモン主義の理念を象徴する衣服を身につけ、女性が大工仕事をし男性が家事をおこなっていた¹¹⁾。このグループこそがフランスで最初の実践的フェミニストの団体といえるが、「フェミニスト」という語彙に関しては、アメリカのサンド研究者アナベル・レアによれば、この時代より以前に、フリーエが「フェミニスト的感性 *sensibilité féministe*」「フェミニスト的概念 *conceptions féministes*」のように形容詞としてこの用語を使った形跡がみられるという。1872年には『椿姫』の作者デュマ・フィスがこの新語を軽蔑語として使用している¹²⁾。しかし、フェミニズムという言葉をポジティブな意味で初めて公にしたのは、フェミニスト運動家で『女性市民』紙の創刊者ユベルティヌ・オークレール（1848–1914）であった。

1.2. サンドのジェンダー思想に関する研究者たちの見解

では、これまでに、サンドのフェミニズムについて研究者たちはどのような見方をしてきたのだろうか。20世紀初頭、ルネ・ドゥーミックは、サンドの小説『アンディヤナ』『ヴァランチヌ』『ジャック』の三作を「フェミニズムの理論を普及させた小説群 *romans de vulgarisation de la théorie féministe*」と定義づけ、評価した¹³⁾。こうしたサンドの評価は定着しつつあったが、その後、一部のアメリカの批評家やフランス人の女権拡張論者たちは、サン

物語世界における「語り手」の意匠」in 日本ジョルジュ・サンド学会編著『ジョルジュ・サンドの世界』第三書房、2003。

10) *Correspondance*. t., Classiques Garnier.

11) 新實五穂、『社会表象としての服飾—近代フランスにおける異性装の研究』東信堂、2010。

12) Annabelle Rea, « Féminisme » in *Dictionnaire de George Sand* à paraître.

13) René Doumic, *George Sand*, Paris: Perrin, 1909.

ドが彼女たちと一定の距離を保っていたことから、サンドを厳しく批判した。例えば、レスリー・ラビーンは、サンドを一躍、当時のベストセラー作家にした小説『アンディヤナ』について、サンドは「他の身分の低い女性たちのうえに自らの女性作家という例外的な地位を築いた」と非難している¹⁴⁾。

サンドと同時代人でサンドを批判した批評家もいた。とりわけ、デジレ・ニザールを見逃すことはできない。文芸批評家ニザールは1836年5月15日版の『パリ誌』で、サンドの小説『アンディヤナ』『ヴァランチヌ』『レリヤ』『アンドレ』『腹心の秘書』『シモン』『レオン・レオーニ』『ジャック』の八作品を挙げ、これらの作品は結婚を否定し不倫を称揚しておりモラルに欠けるとサンドを激しく糾弾したのである。これに対し、サンドは書簡体小説『ある旅人の手紙』に「ニザール氏へ」と題した特別の章を設け、この「第12番目の手紙」のなかでニザールが挙げたすべての作品について一編ずつ説明を加え、時として見当違いがみられる彼の過った批評を訂正しつつ、丁寧に返答している。

とくに、サンドは小説の中で自らが描こうとした愛に関するニザールの誤解を解くために論を張り、これらの小説の中で自らが描いた「廃墟の上に築き上げた愛」は「偉大で、貴く、美しく、意志があり、永遠なるもの」で、その愛とは「イエス・キリストが作り、聖パウロが説明し、そのうえ、民法典の第5章第6か条が夫婦の義務について触れている結婚のことである」と記している点は注目される¹⁵⁾。サンドはさらに、十九世紀の女性たちに不平等を押しつけ、彼女たちを前世紀の女性たちより不幸にしたこの法典について「社会がこれ（民法典）を刷新するよう要求している」と強調している¹⁶⁾。このようにナポレオン民法典の変革を促すサンドは、まさにフェミ

14) Naomi Schor, « Le féminisme et George Sand: *Lettres à Marcie* », *Revue des Sciences humaines*, n° 226, 1992, p. 23.

15) *Œuvres autobiographiques*, t. II, p. 936, note 1 (*Lettres d'un voyageur*).

16) 1810年、刑法は不倫を犯罪とみなし、現場を官憲が取り押さえた場合、夫の場合には罰金が課され、妻には禁固3ヶ月から24ヶ月の刑が言い渡された。ユゴーと画家ヴィヤールの妻レオニーは、嫉妬した画家の密告によりこの犠牲となった。この法律は、場合によっては、夫は犯罪とみなされること

ニストの実践的運動家の姿に符合している。この点では、サンドはアンチフェミニストにはほど遠く、明らかにフェミニストと共通の立場に立脚しているといえるだろう。

他方、優れたサンド研究者として知られるアメリカのナオミ・スコールは、サンドが「性はひとつしかない¹⁷⁾」と述べ、子供時代の長男モーリスを「出来損ないの娘のソランジュよりずっと女らしい子供だ」と描写している点について、サンドのこの記述は「明白な性差別」であると指摘している。性の単一性を認めることにより男女平等を否定するからだという。しかし他方でスコールは、サンドが「矛盾をなんらかの満足できる方法で解決したという意味においては、これらの矛盾を実体化させ、明らかにしたという意味で」サンドのフェミニズムを「矛盾のフェミニズム」と定義し、一定の評価を与えている¹⁸⁾。

サンドをブルジョワ的な恵まれた「ノアの奥方」と見なし、とくに後期作品を過小評価する、シャルル・モラス、アンドレ・モロワ、ピエール・サロモンといった前世代の批評家たちの批判に対し、現代のサンド批評家たちはニコル・モゼやベアトリス・ディディエを先頭に、ミッシェル・エック、マルチヌ・リッド、イザベル・ナジンスキー、アナベル・レアなどが、その精緻な作品研究を以てサンドのジェンダー思想と作品を積極的に擁護している¹⁹⁾。21世紀に入ってからは、サンド生誕二百年を記念した複数の国際

なく妻を死刑にすることもできる、極めて女性に不利なものであった。参照：Michelle Perrot, *Mon histoire des femmes*, Seuil, 2006. アラン・ドゥコー、『フランス女性の歴史 目覚める女性たち』山方達雄訳、大修館、1981、pp. 173-176。

17) « *Il n'y a qu'un sexe.* » サンドはこの言葉をイタリック体にして強調している。 *Correspondance*, t. XX, p. 297, Classiques Garnier, 1985, Lettre du 15 janvier 1867.

18) Naomi Schor, “Il et elle : Nohant et Croisset”, *op. cit.*, p. 277. Naomi Schor, “Le féminisme et George Sand : *Lettres à Marcie*”, *Revue des Sciences humaines* n° 226, 1992.

19) 新聞記者でサンドの生涯と作品を簡略に纏めた *George Sand* (Seghers, 1973) を著わしたクロードィヌ・ショネは、「女性の知性や行動力に関し

シンポジウムが世界各地で開催され、論文集が刊行された²⁰⁾。サンドの諸作品に関するジェンダー的アプローチの研究も数多く発表されたが、いずれもサンドをフェミニストとする点で意見の一致をみている²¹⁾。

1.3 ジェンダー問題を具現する作品群

サンドは長編、中編、短編小説、劇作、童話、芸術批評、書評、政治文書など百編を超える作品を執筆し、二万通を超える書簡を書き残した。男性が主人公となっている小説は『スピリディオン』や『ある旅人の手紙』を除けば殆ど存在しない。他方、女性が主人公の作品はすべてその背景や文脈にジェンダーの問題が絡んできている。その中でもジェンダーを直接的に扱った作品として突出しているのは、サンドを19世紀フランスの男性で占められる文壇に仲間入りさせた『アンディヤナ』、これに続く初期作品として『ヴァランティース』『レリヤ』『ある夢想者の物語』『モープラ』『ロルコ』『リュスコック』『ガブリエル』、中期作品の『イジドラ』『コンスエロ』『捨て子フランソワ』、後年の『最後の愛』『ナノン』などであろう。

て（サンドが言っていること）は、もっと重大だ。自分の天賦の才を忘れていていると思われるサンドは、この点でむしろ反動的だ」とサンドをアンチフェミニストであると批判している。Claudine Chonez, « George Sand et le féminisme », *Europe*, 1978, p. 78.

20) サンド生誕二百年を記念する国際シンポジウムは、フランス、アメリカ、イタリア、アイルランドなど世界各地で開催された。日本ジョルジュ・サンド学会もまた、2004年、フランスから Françoise Guyon, Béatrice Didier, Jose-Luis Diaz, Anne Baron, Bruno Viard, Nicole Savy のサンド研究者を招聘し、日仏会館、日仏学院にて、国際学会を主催した（関連する各種講演会を慶應義塾大、東大、京大、学習院大、九州日仏会館にても開催）。この国際シンポジウムの成果 *Les héritages de George Sand aux XXe et XXIe siècles – les Arts et la politique* は、2006年、科研費を得て慶應義塾大学出版会より刊行された。

21) “Vers une définition du féminisme de George Sand” (Modern Language Association 1990), « Femmes, féminin, féminisme chez George Sand » (Groupe international de recherches sandiennes, 2003)、パリの国会議事堂で開催されたサンド生誕二百年記念国際シンポジウムにおける “George Sand : Littérature et politique”, “Féminismes” (2004) などが挙げられる。

旅人の主人公アメデの前で突然美しい女性に変身する美声の少年とエトナ山の爆発が詩情あふれる夢幻を醸成する『ある夢想者の物語』(1830)、前述したクレオールのヒロインの物語の『アンディヤナ』(1832)に続く、階級の違いを超えた結婚の可能性を模索する『ヴァランティーンヌ』(1832)、肉体と魂、双方が満たされる「絶対の愛」を求める「大理石」レリヤの純粹性、それに対し「女には自分を市場で売って娼婦になるか結婚という契約で売る二つの道しかないのよ」と言い切るレリヤの姉妹の高級娼婦ピュルケリの快樂主義、この二つが交差し男達の欲望が絡みつく悲劇の物語『レリヤ』(1833)、また、封建的な山中の古城で狼少年のように育ったベルナルを自分に相応しい教養ある理想の人間になるまで自らが教育し、立派に成長したとき愛を受け入れて結婚し多くの子供を得る美しい女性エドメの物語『モーブラ』(1837)は、18世紀から大革命の時代を背景に繰り広げられるミステリーと犯罪に彩られた歴史物語でもある。中期作品の『魔の沼』(1846)のマリーも男性を導く女性といえよう。『捨て子フランソワ』(1850)では、孤児のフランソワがマドレーヌに拾われ養育される。成長し養父の借金に苦しむ養母マドレーヌをフランソワは助けるが、二人の間に次第に恋が芽生え、ついには二人は社会の偏見や年齢差を乗り越え、麻打ち人の語り手が「これまで見たこともないくらい一番立派な上品かつ愉快的な」と形容する結婚式を挙げる。この小説は少年ブルーストに影響を与えた小説だが、ここにも『モーブラ』と同様、ヒロインが若い男性に教育を施すという構図が成立している。

ショパンや子供達とのマヨルカ島からの旅の帰途 1839年にマルセイユで書かれた小説『ガブリエル』(1839)は、文化的に構築された性の二元論のヒエラルキーを否定している点で最もフェミニスト的なサンドの作品の一つである。祖父に男として育てられた女性ガブリエルは、従兄弟アストルフに恋して結婚、女となって女性に不平等な遺産相続法、窮屈な衣服、男性とは異なる教育など男に依存する女の不自由な人生を発見する。この小説の中で、ガブリエルは「私は魂に性があるとは思わない」と言っている²²⁾。ここに

22) *Gabriel*, Edition des Femmes, p. 59.

は後に述べる1837年の『マルシーへの手紙』に刻印されているサンドのジェンダー思想の両義性は一切認められない。したがって、『ガブリエル』こそが、サンドのジェンダー思想を最も直接的に表明している作品と見なすことができるだろう。

このほか、短編『ロルコ』（1838）では、仮面をつけた女が祖国ヴェネチアとオーストリア将校フランツへの愛のために命をかける。真夜中の霧に煙る町ヴェニスに繰り広げられる名前をもたぬ神秘的な女の祖国愛と悲劇の物語である。海賊が登場する『リュスコック』（1839）では、海賊の頭領オリオに絶対服従をもって仕えるアラビア人の美貌の黒人奴隷ナームが描かれている。彼は主人と一糸乱れぬ行動をともにしヴェネチア湾に進入してくるヴェネチア国の政敵を退治する勇士だが、実は男装した女性ナーマでもある。オリオ、妻のジョヴァンニ、ナーマの三者の間に奇妙にも調和のとれた愛の三角関係が成立している異色のこの物語でも、クロスドレッシング（異性装）をする女性ナーマが男の海賊に負けぬ強靱さを見せている。

ジプシーの娘コンスエロがヨーロッパに名を馳せるオペラ歌手となりボヘミアの若きルードルシュタット伯爵の死の床で結婚する『コンシュエロ』（1842）、この長編小説では少年ハイドンと旅をする少女コンスエロの男装が司祭に暴かれる場面がカトリック教会の強大な権力イデオロギーとサンドのフェミニズムとの対決を象徴的に描いており、ズボンをはいたことが罪状に付け加えられ火あぶりの刑に処せられたジャンヌ・ダルクの姿を彷彿とさせる。サンドの作品では、異性装がヒロインのセクシュアリティを描く上で大きな役割を果たしている場合が数多く認められるのである。ヒロインがジャンヌ・ダルクのイメージに重ねられている『ジャンヌ』（1844）では、若い城主ギヨームやイギリス貴族のアーサーが彼女に愛を告白するが、クルーズ地方の土着信仰と巫女であった母の教えを守る誓いを立てていたジャンヌは金銭の誘惑や男の欲望を拒否して塔から飛び降り、純潔無垢のまま彼女を愛する仲間たちに看取られて死んでゆく。

高級娼婦と純粋な女性の二つの顔をもつヒロインの物語『イジドラ』（1846）の冒頭場面は「庭を隔てて住む不思議な隣人イジドラに恋するロラ

ンの「女性とは何か」という日記から始まっている。不義を働いた妻とその若い愛人を罰する夫の嫉妬心を描いた後期作品の『最後の愛』（1867）、同じく後期作品の『ナノン』（1872）は、大革命を背景に大叔父に育てられ田舎に暮らすみなし子の少女ナノンが、勇気果敢な若者エミリアンと知り合い、大革命の嵐のなかで健気に生きてゆく姿を描いている。ナノンは貴族の友人に読み書きを教えてもらい、大革命の時には優れた経営感覚を発揮し、ついには裕福な女地主となり、果ては自伝を書くまでになるという独立心に富む女性である。

このようにサンドは、40年にわたる作家生活のなかで、ややもすれば、知性の面でも人間的な面でも男性より遙かに優れ、独立自尊の精神にあふれる自由な心をもつ女性を描き続けた。

ヒロイン達の職業を概観してみると、サンドは仕事をもち、しかも成功した数多くの女性たちを描いている。『マテア』では結婚し子供を持つ若く美しい女店主、『腹心の秘書』では女性元首、『ロルコ』の女の殺し屋、『リュスコック』の女海賊、『オラース』では女優、『コンシュエロ』ではコントラルトの女性オペラ歌手、『ルクレチア・フロリアーニ』の劇作家、『黒い谷』では女性工場長、『母の面影』の女性画家などである。女性には女性専用のダンス、生け花、作法などを教え、家庭に入ることを良しとする教育を受けて育ったソフィーを理想の女性像とするルソーとは正反対の、「たくましく」「現代的」ともいえる女性像をサンドは活写しているのである。

（Ⅱ）何がサンドをアンチフェミニストと規定したのか

Ⅱ.1. 1848年のアポリアーサンドの立候補者擁立事件

サンドは後述する『マルシーの手紙』の中で、男性と同等の女性教育の必要性を説き、さらには、当時の一般的思潮に真っ向から対立する離婚肯定論まで発表しようと試みた。その極めてフェミニスト的傾向の強いサンドが、当時のフェミニストたちにアンチフェミニストと断罪されたのはなぜだろうか。その原因を辿ってみると、彼女たちがサンドに託した夢と作家サンドの現実との間に生じた齟齬にあった。

1848年、フランスには二月革命の嵐が吹き荒れていた。以前のブルジョワジー主体のフランス大革命や1830年の七月革命とは異なり、労働者主体の市民革命が遂行されようとしていた²³⁾。サンドは率先して『民衆の大義』『共和国公報』『真の共和国』などの雑誌に政治文書を書き、ルイ＝ブランの臨時政府を支持して革命の成功を熱望した。なかでも『共和国公報』第12号には「女性の社会的権利」という題名の寄稿文を掲載し、また『レフォルム』紙および『真の共和国』紙の編集者宛てには「「ひとつの性」の名のもとに」、さらには、政府中央委員会委員に「女性たちに平等の権利を」と題した手紙を送るなど、サンドは女性擁護のために積極的な活動を展開した。当時のフェミニストたちがこのように活発な政治活動に邁進するサンドを見逃すわけがなく、新聞『女性の声』紙は1848年4月6日の集会でサンドを議会選挙の候補者として擁立することを決定し、このことを新聞紙上で公表した。しかし、サンドはこの決定に反応を示さなかった。正確に言えば、サンドは『女性の声』新聞にも、またその編集長のウージェニー・ニボワイエにも沈黙を通したのである²⁴⁾。しかし、こうした姿勢が彼女たちの誤解を

23) 七月革命以降のフランスは銀行家など少数の大資本家と国王ルイ・フィリップによる七月王政が続いていたが、有権者は国民の1%に過ぎず一般市民や労働者は無論のこと、資本家の大多数を占める中小資本家も政治に参加できず、検閲や集会の禁止、選挙改悪政策を打ち出すギゾー内閣の反動政治、これに46年の凶作、47年の不況が重なり、国民の間に不満が充満していた。首相ギゾーの失言「働け、そして金持ちになれ。そうすれば有権者になれるだろう」が労働者や失業者の怒りに火をつけた。樹立した臨時政府のルイ＝ブランは労働者のために国立作業場を設立したが、過剰な登録者数が国の財政を圧迫し作業場の廃止を余儀なくさせた。結局、臨時政府においても主導権は資本家にあることが判明し、パリの民衆は武装蜂起する。六月蜂起では死者、逮捕者ともに一万人を超えたが、結局、革命は失敗に終わる。12月に大統領選が行われ、ナポレオンの甥、ルイ＝ナポレオンが即位。以降、1870年まで続く政体が第二帝政である。

24) サンドは立候補者公認委員会宛てに送るつもりだった未完成の長い手紙の中で、女性の問題について語っている。そこではあらゆる女性の直接的な政治介入に反対しながらも女性の市民権を要求している。手紙は最終的には投函されなかったため、サンドのこの考えが公にされることはなかつ

呼び、ひいては非難を浴びることになり、さらにはアンチフェミニストの烙印を押されることになったのだった。

しかし、一体、本人の確認なしに公にされた事柄について、サンドの側からわざわざ相手に対して返答する義務があったのだろうか。この時期、サンドはラマルティエヌが外務大臣を務める臨時政府への協力だけでも目まぐるしく多忙な日々を送っており、そのうえ『民衆の大義』の創刊、劇作『王は待つ』のフランス座上演、私生活では別離の後のショパンとほんの一言を交わしただけの偶然の再会——このときサンドは娘のソランジュに子が誕生し、自分に孫娘ができたことをショパンの口から知らされたのだったが——いずれにせよ、サンドの身边はこのように多忙を極めていた。

またサンドは、女性に選挙権がなく男性にもほんの一部にしか投票権が認められていなかった時代に女性が選挙に立候補するなどということは冗談だと考えていたことも確かである。サンドの政治思想は共和主義であり、総国民の1%にも満たない資産を持つ一部の特権階層が国を支配するのではなく、一般市民が主軸となって政治を実現する共和国を理想としていた。サンドの頭の中には、順序として、最初に共和国の樹立、次いで国民の普通選挙、それから女性の選挙権の獲得を目指すという図式がはっきりと描かれていたのである。とりわけ1848年の政治的に大きな動きのあった時期には、その波に乗り、これまで大革命や七月革命で多くの流血と犠牲を払っても実現できなかった共和制を一気に樹立したいサンドの願いと期待は並大抵のものではなかったものと推測される。

II.2. 「性補完論」と「トウーセックス論」のアポリア

ルソーが18、19世紀のフランス社会に大きな変革をもたらした偉大な思想家であることは自明の理であるが、その一方、『エミール』で男子と異なる女子教育の必要性を主張したことから、アンチフェミニスト思想の持ち主

た。 *Correspondance*, t. VIII, p. 391, Lettre aux rédacteurs de *La Réforme et de La Vraie République*, 8 avril 1848. « Comité de la gauche qui donnait son investiture aux candidats », *Correspondance*, t. VIII, p. 400, note 1.

であったと指摘されている。本章では、ルソーの提唱した「性補完論」と当時の科学界を席卷していた「トゥーセックス・モデル論」とはどのようなものであったのか、またこの二つの論の相関性について、主として、トマス・ラカー『セックスの発明——性差の観念史と解剖学のアポリア』および『科学史から消された女性たち——アカデミー下の知と創造性』を参考としつつ考察を続けたい。

フランスの18世紀は、医学界における比較解剖学の発展により一大発見がおこなわれた。性に関する科学理論がそれまで信じられていた「ワンセックス・モデル論」ではなく「トゥーセックス・モデル論」が提示され、このことが当時の人々や世間を賑わせていた²⁵⁾。「ワンセックス・モデル論」とはアリストテレスに代表される古代以来の人間観であり、男性を完全な人間とする一方、女性は不完全な存在とし、男性の性、つまり「ワンセックス・モデル」のみを注目する考え方を示す²⁶⁾。この「ワンセックス・モデル論」にあっては、女性の身体器官は男性の裏返しのようなものか、あるいはそれに類するものに過ぎず、女性の身体は男性の身体とは異なるという概念がなかった。したがって女性固有の身体器官を指す名称は存在しなかったが、比較解剖学が女性には卵巣や子宮といった男性とは明らかに形状も機能も異なると思われる身体器官があることを発見したことから、ルソーの時代になると、人間観の劇的な変化に伴い、両性を二つの別の存在と捉える「トゥーセックス・モデル論」が誕生し、女性の生殖器官が分節され、初めて女性の身体器官に名称がつけられたのである。

しかし、一見、女性に優しいと思われた「トゥーセックス・モデル論」は、女性たちにとって歓迎するにはほど遠い性差別理論であった。という

25) 18世紀末の医学界で男女間の比較解剖学が大きな発展を遂げた理由の一つは女性の健康管理に対する配慮から生まれたものだった。とくに比較骨格研究が注目された。しかし女性への配慮と同時に、産婆には女性の解剖学上の専門知識が足りないと男性の医者が産婆の手から仕事を奪い取ったのと時期を同じくしている。同書、p. 266.

26) アリストテレスは「女性は男性より（体温が）冷たいので理性が少ない」と述べた。同書、p. 219.

のは、「トゥーセックス・モデル論」は男女の差異を強調することによって、女性を弱者と規定し家庭や育児に縛りつけようとするものであったからである²⁷⁾。

女性を家庭に閉じ込めようとする傾向はすでにモリエールやフェヌロンの時代から始まっており、宮廷やサロンで活躍する知性に恵まれた女性たちへの牽制という形で表われた。よく知られているように、17、18世紀のパリは女性サロンの全盛時代であった。貴族女性が主催する多くの知的サロンが誕生し、当時の男性の文学者、哲学者、政治家、芸術家、建築家などが著名な女性サロンに通い、彼らはこれを足がかりに社交界への出世を果たした。17世紀サロンで流行した「プレシオジテ」は行き過ぎであったとしても、18世紀の女性サロンはフランスの芸術文化や啓蒙思想の発展に大きく貢献し、時としては国家政策の決定の場として重要な役割を果たす場合さえあった²⁸⁾。

しかし、男性科学者や哲学者たちは、科学や芸術が女性サロンの影響により衰退傾向にあると彼女たちを攻撃した。当時、サンドの父方の遠縁にあた

27) トマス・ラカー『セックスの発明——性差の観念史と解剖学のアポリア』高井宏子・細谷等訳、新栄堂、1998、p. 277。ヴォルテールに至っては「ラップランドからギニア海岸に至るまで、そしてアフリカから中国に至るまで世界中どこでもどの人種においても」肉体と精神の強さにおいて男性が女性に勝っており、それゆえ、世界中どこでも男性が女性の支配者であるのは驚くに値しない。」と記している。

28) 「プレシオジテ」は才女気取りを意味した。洗練された表現の探求が昂じ、例えばスキュデリー嬢の土曜会では「燭台」は「太陽の代わり」「シャツ」は「生者と死者の絶えざる仲間」、「頬」は「恥じらいの王者」、「月」は「沈黙の松明」と表現しなくてはならなかった。エルンスト・テオドル・A・ホフマン、『スキュデリー嬢』、吉田六郎訳、岩波書店、1956。「女学者という称号は一つの嘲笑である。そこから想像されるのは、何一つ知っていないくせに、知っていると思いついでいる女、まがい物の知識をひけらかして皆を退屈させる女である。その上、このような女性は、無作法な自惚れ屋で、ほとんど誇大妄想狂に近いと考えられていた」(E. バダンテール、『ふたりのエミリー——18世紀における女性の野心』、中島ひかる・武田満里子訳、筑摩書房、1987、pp. 69-70)。

るルイズ＝マリ＝マドレーヌ・デュパン夫人の秘書として雇われ、著名なサロンの語彙目録の編集の仕事に携わっていたルソーもまた、サロンの女性たちを激しく批判した²⁹⁾。「フランスの芸術、学問の衰退」の原因は、サロンの「女性が支配する場所のどこも彼女の好みが支配的となり」「男性の思考を女性のレベルまで引き下げること」に慣れてしまったことにあるが、思想は軟弱なサロンでは養われず、「戦場においてのみ錬磨される」。したがって、ルソーは、男性はサークルやクラブから引退すべきで、一方、婦人や少女たちはお互いの家庭を訪問しあうべきだと主張した³⁰⁾。この背景には徴兵制度が布かれ始めようとしていた当時の歴史的背景があるものと考えられるが、このような女性のサロン批判にみられるようなルソーのアンチフェミニスト的な傾向は、デュパン夫人の秘書時代に培われたようである。

ルソーの『エミール』第五部は比較解剖学についても論じており、男女の差異と同一性についての有名な一節から始まっている。ルソーはここで「性をのぞけば、すべてにおいて女性は男性と同じである。(…)一方、性が関係してくると、女性はあらゆる点で異なってしまう」と述べ、身体的な差異は「いつのまにか精神的な差異へと至る」と結論づけている。その結果、「男性は積極的で強いはずだし、女性は受動的で弱いはずだ」ということになり、「男性と女性は、その性格と気質において構造的に同じではないし、またそうであってはならない。そして、このことがきちんと証明された暁には、男女平等の教育は禁じられるであろう」とルソーは予測するのである³¹⁾。さらにルソーは、女子が受けるべき教育について次のように続けている。

29) Sénéchal, Anicet, “J.-J. Rousseau, secrétaire de Madame Dupin, avec un inventaire des papiers Dupin dispersés en 1957 et 1958”, *Annales de la Société Jean-Jacques Rousseau*, t. 36, 1963–1965, pp. 185–186.

30) ロンダ・シービンガー、『科学史から消された女性たち——アカデミー下の知と創造性』、小川真里子、藤岡伸子、家田貴子訳、工作舎、1992、pp. 199–200.

31) ジャン＝ジャック・ルソー『エミール』（下）、今野一雄訳、岩波書店、2009。

男性から好かれること、その役に立つこと、男性から愛され、尊敬されること、男性が幼い時はこれを養育し、大きくなればその世話をやくこと、彼らを慰めること、彼らのために生活を楽しく快いものにしてやること、こういうことがあらゆる時代を通じて女性の義務であり、小さいときから女性に教えこまなければならないのである。³²⁾

トマス・ラカーはルソーのこのような女性についての考察や「性補完論」について「啓蒙時代に広く受け入れられていた因果関係を単に強烈な形で言い換えたものにすぎない」と指摘している。つまり、ルソーのこうした女性差別的な言説はルソー自らが考え出したものではなく、ルソーは当時の医学あるいは解剖学が提唱していた「トゥーセックス・モデル論」に基づいて「性の補完論」を主張したのだった³³⁾。シービンガーもまた、「生物学的な性と社会的に作られたジェンダーとの区別を崩壊させてしまう」「性補完論」の主張者は、世の習わしや確立されていたことをただ受け入れ、それを自然なものと呼んだにすぎなかったのだと考えている³⁴⁾。いずれにしても、このようにして、著名なルソーの『エミール』(1762)は「17世紀の貴族女性を家庭に縛ろうとする試みと18世紀のすべての階級の女性に適応されるべく登場した母性の理想像とを橋渡しするもの」としての役割を果たすことになる。さらに、国民公会は女性には市民の権利を行使するのに必要な精神的肉体的強さに欠けると考えたために、「性補完論」に則り、女性の政治的権利と集会の権利を禁止してしまった。すなわち、1790年代までにはヨーロッパを席卷した「性補完論」は、国家の立法にまで取り入れられたのであった。

32) 同書、p. 28.

33) トマス・ラカー、前掲書、p. 268.

34) ロンダ・シービンガー、前掲書、p. 280.

(Ⅲ) ジョルジュ・サンドのジェンダー思想における両義性と現代性

Ⅲ.1. 『マルシーへの手紙』——サンドの女子教育論

一般にサンドのフェミニズムを最もよく表明している作品としてよく挙げられるのが、『マルシーへの手紙』である。『マルシーへの手紙』は宗教思想家ラムネーの主催する新聞『ル・モンド』紙に1837年に連載されたサンドの書簡体小説である³⁵⁾。マルシーの男性の友人が悩めるマルシーの相談相手となり、手紙で助言を与えるという形式をとっており、語り手はこの男性の友人である。往復書簡ではなく、一方的にこの男性がマルシーに語りかけ、マルシー自身は作品中に直接登場することはなく沈黙している構成を取っている。

第一の手紙では、貧しく持参金がないために将来の夫を見つけることの出来ないマルシーの悩みが打ち明けられ、これに対し、友人は男性なしで生きる道もあることをマルシーに示唆している³⁶⁾。第三番目の手紙になると、この友人はマルシーに結婚をし家庭に入ることを奨励している。語り手は女性が社会で不当に扱われていることを認めてはいるが、男女の性別は自然のもので、政治的な運動や活動は男性のものであるのだから女性は家庭で母としての役割を果たし祈りに捧げる静かな生活を送ることを推奨するのである³⁷⁾。こうした語り手の言説には、ルソーの女性観にも通底するサンドのジェンダー思想における両義性が反映されていると解釈しうるだろう。

ところが『マルシーの手紙』の第六番目の手紙では、ルソーが『エミール』の中で提唱した女の子のしつけ教育ではなく、男子と同等に哲学を教えるべきだとするサンドの持論が次のように展開されている。

35) 『マルシーへの手紙』はサンドが1843年に付け加えた「序文」とともにペロタン社出版の『ジョルジュ・サンド作品集』第16巻の153頁から220頁に収録されている。 *Œuvres de George Sand*, t. 16, Perrotin, 1842–1843.

36) *Ibid.*, p. 167.

37) *Ibid.*, p. 188.

男の子には哲学が教えられている。当然、女の子にも哲学を教えるべきであろう。(…) 今日、多くの男性たちが生理学的にまた哲学的に男は女より優れた種であると肯定して憚らない。このような固定観念は私には非常に悲しいことに思われる。そしてもし私が女であったなら、神を自称するような男の伴侶となったりその愛人となることさえ受け入れるに忍びないことであろう。³⁸⁾

サンドは男性が女性より優れているとする男達の風潮を嘆き、女性にも哲学を教えるべきだとし、女子教育の必要性を強調しているのである。サンドが男性の語り手を通して男性批判をしているのは属目に値する。サンドの作品世界には女性の権利と自由の問題を理解するフェミニストの男性が登場しているのである。サンドの男性批判は、次の引用にも読み取られる。

女性たちは嘆かわしい教育を受けている。そこにこそ男性たちの女性たちに対する罪があるのだ。男性たちは最も神聖な制度の恩恵を独占して、あらゆるところに悪弊をもたらしている。³⁹⁾

連載小説『マルシーへの手紙』は、ラムネーとの間に齟齬が生じ6回の掲載のみで中止となってしまうのだが、その原因とはサンドが愛のない結婚を否定し離婚を擁護したのに対し、カトリック信者のラムネーは離婚に絶対反対の立場を固持したことにあった⁴⁰⁾。離婚が法的に禁止されていた時代にあって、離婚を擁護しようとしたサンドは十二分にフェミニストであるといえるだろう。ところが、6年後の1843年5月にサンドが付け加えた序文では、次のように述べている。

38) *Ibid.*, p. 213.

39) *Ibid.*, p. 216.

40) 最後の手紙の「第六の手紙」は1837年3月27日の『ルモンド』紙に掲載された。

いずれにせよ、私が単に孤独でいることの煩わしさを描くことから始めたこの種の序にあたる冒頭の数頁を読んだ人たちは、そこに原則の表明、つまり結婚に賛成か否かの理論あるいはキリスト教に賛成か反対かの理論を読みとることを望んだ。しかしながら、そうしたことは一切書いていないので、この断章から確固たる推論を引き出すことのできるような決定的な色は何もついていないと思う。(…)私はこの新聞を創設し主幹を担ったラムネー師への忠誠心から『ルモンド』紙に協力させていただき名譽を授けられて連載をお引き受けしたのです。彼が新聞を廃刊してからはすぐにその理由をお尋ねすることもなく、私はお暇を頂戴したのです。⁴¹⁾

サンドの説明によれば、『マルシーへの手紙』の掲載の中断はラムネーとの間の意見の相違によるものではないことになるが、ナイジェル・ハーキンスの研究が明らかにしているように、実際には離婚をめぐる意見の対立からサンドとラムネーの関係は次第に距離ができていった。ラムネーはフェミニストの自由の顔を持つサンドに自分の陣営である宗教のほうに向いてもらいたいと考えたが、現実にはそうならなかったのである⁴²⁾。

『マルシーの手紙』の最後の手紙「第六信」は1837年3月27日の『ルモンド』紙に掲載された。その2年後に書かれた『ガブリエル』については先に略述したが、サンドはこの作品の中で、男の子として育てられた女の子が元の性に戻って結婚し妻としてみると女がいかに夫とは異なる不自由な人生を強いられるかを描いている。そこには極めて具体的な形で女性の衣装の窮屈さに始まり、日常生活における女性に課せられた不自由と不平等が描出されている。さらに、結婚する前の男性のガブリエルが、祖父の教育により哲学のみでなくラテン語やスポーツまで教えられ、どの科目でも優秀な成

41) *Lettres à Marcie*, op. cit., pp. 153.

42) Nigel Harkins, “Sand, Lamennais et le féminisme : Le cas des *Lettres à Marcie*” in *Le siècle de George Sand*, édité par David A Powel, Rodopi, Amsterdam, 1998, pp. 276–279.

績を示したことを強調している。サンドは女性が男性と同じ教育を与えられれば男性より劣る存在ではなく、場合によっては男性をも凌ぐ可能性がある」と主張しているのである。『ガブリエル』は劇場で上演されるはずであったが、当時の人々にとってあまりにも常軌を逸した内容であることから劇場支配人に拒絶されたため、実際に上演されることはなかった。現代においてさえ過激なテーマを内在しているといえる『ガブリエル』は、サンドのジェンダー思想が明確に刻印された作品であり、そこには『マルシーへの手紙』で作者が書き得なかったことが自由に描かれ、縦横無尽に言い尽くされている。『マルシーへの手紙』の掲載中断をめぐる経緯や二年後に書かれた『ガブリエル』の内容の斬新さは、サンドが明らかにフェミニストであることを示しているといえよう。

III.2. 『メルラン夫人の回想記』——女子教育の可能性

サンドが1836年4月17日の『パリ誌』に発表した『メルラン夫人の回想記』と題する批評文はサンドのフェミニスト宣言でもある。この作品は、当時の著名人が訪れるサロンを開いていたメルラン夫人が出版した自伝的回想記『わたしの最初の12年』についてサンドが執筆した書評である。この作品は形式こそ書評の形を取っているが、内容は文芸批評のような論評であり、そのほとんどが19世紀の女性作家の問題や女性の教育の必要性を強調することに割かれている⁴³⁾。その意味で『メルラン夫人の回想記』は、『マルシーの手紙』に先立ち、サンド自らのジェンダー思想を表明した作品とみなしうるだろう。サンドは、この作品の中で、次のように述べている。

われわれは確信している。本当に強い男性、したがって根っからの善人で賢い男性とは、女性の知的な解放を望んでいるということ。このことを懼れる人は軟弱な男性であり、自分たちの優越性を確認するために憲兵を必要とし、助けがなければ自分たちが雇っている奴隷以下の状態

43) この作品の発表については、サント＝ブーズが4月1日の『両世界評論』で予告している。

に落ちてしまうような男たちなのだと思う。したがって、おそらく、科学、芸術そして哲学の分野が両性に解放される時代がくるだろう。音楽、ダンス、ミニチュア絵画を除いては、女性たちは芸術の実践において男性と同等の地位を望むことができる例をわれわれはまだ目にしていない。女性たちの能力は疑わしいと思われる点があったとしても、しっかりした方向性が与えられれば、女性には利点ばかりが認められることは確かなのである。⁴⁴⁾

ここでサンドは女性の「知的解放」という言葉を使って女性の教育の必要性を説き、これを理解しない男性の態度を牽制している。「われわれは確信している」という一行から始まる、女性を理解しない男に対するサンドの批判は、現実に活動しているフェミニストの強い語調を連想させる。サンドが女性の知的能力の潜在性を強調し、歌やダンスなどの女性向きとされる分野のみならず、科学、芸術、哲学の分野でも女性たちが進出する時代がくることを予言していることにも着目すべきである。というのは、前述したように、ルソーは『エミール』の中で女性にはダンスや作法など男性と別の女性らしい教育を与えるべきだとしているからである。サンドは私生活ではジャム作りや刺繍などを好み、家庭内の女性的な仕事と目される仕事に携わることに積極的であったが、他方で、『ガブリエル』『メルラン夫人の回想記』『マルシーの手紙』に代表してみられるように、女性が男性と同等の教育を受ければ男達に負けない実力を発揮すると述べ、ルソーとは異なる女子教育の必要性を繰り返して主張している。こうしたサンドの思想の立脚点は、ルソーの『エミール』を批判し、ルソーの死後に女子教育論『エミリーの会話』を著し、そこで「女性は女性であるのではなく、教育や制度によって女性となる」と論を張ったデピネ夫人⁴⁵⁾の

44) George Sand, *Le Souvenir de Madame Merlin in Questions d'Art et de Littérature des femmes*, 1991, p. 83.

45) シャルル・デュパン・ドゥ・フランクイユ Charles Louis Dupin de Francueil は、一時期、デピネ夫人（ルソーに別荘エルミターージュを提供し、その学研生活を援助した）の愛人であった。彼女との間に二人の子供を設けたといわ

立場にも通底するものである⁴⁶⁾。とすれば、少なくとも女子教育論に関する限り、デピネ夫人と同様、サンドは明らかなフェミニストであったと考えられる。

しかしながら、ひとたび実践的なフェミニズム運動が問題となると、サンドの見解は次のように硬化する。

われわれは現代のひどく唐突に声高に主張され始めた女権拡張運動は、女性の解放にとって利益をもたらすより害を与えるものとする。彼女たちはまだ自分たちが享受できる力があるかどうかを証明されていない権利を急いで要求しようとしている。もし彼女たちに助言しなければならないとするならば、もう少し控えめな反対運動をし、その活動が賞賛されるようにすべきであろう。政治的転覆を謀ろうとすることは、彼女たちに開放の機会を決して与えはしないだろう。身体的な力の行動は自然によって彼女たちに否定されているというのであるからには。しかし、知恵と説得力のある天使のようなやさしさや、真の精神的威厳が示されるならば、彼女たちの運命は改善され、彼女たちを長いスパンでまともに満足のいく、まずまずの地位に置くことが可能となるだろう。⁴⁷⁾

ここには一部の恵まれた女性たちが声高に主張する運動に懐疑的なサンドの姿が垣間見られる。フェミニストであるサンドが女権拡張運動に反対するのはなぜなのか。たしかに、そこにはフェミニストとしてのサンドの矛盾と両義性が認められる。しかし、19世紀という時代は激しいアンチフェミニストの時代でもあった。自分の名前すら書けない女性が大半であり、選挙権

れる。“J.-J. Rousseau, secrétaire de Madame Dupin”, *op. cit.*

46) デピネ夫人に関しては、次の書が参考になる。Elisabeth Badinter, *L'amour en plus – histoire de l'amour maternel, XVIIe – XXe siècle*, Paris, Flammarion, 1980, Elisabeth Badinter, Emilie, *Emilie ou l'ambition féminine au XVIIIe siècle*, Flammarion, 1983, A. L. Thomas, *Essai sur le caractère, les mœurs et l'esprit des femmes dans les différents siècles*, 1772, Champion-Slatkine, 1987.

47) *Le Souvenir de Madame Merlin*, *op. cit.*, p. 86.

のある男性の数も限られていた時代にフェミニスト運動を過激と思われる方法で展開するのは現実的ではないとサンドは考えていたのである。

III.3. サンドのジェンダー思想における両義性と現代性

『メルラン夫人の回想記』で確認されたサンドが主張する女子教育の必要性は、『マルシーの手紙』においても確認される。

女性は法律が彼女たちに認めていない職業には適してはいない。しかし、それは女性たちの知性が劣るということを示しているのではなく、彼女たちの受けた教育と性格によるものなのだ。教育の問題は時と共に消滅するだろうが、性格の問題は私には永遠の問題として残るだろうと思われる。⁴⁸⁾

ここでサンドが「法律が女性たちに認めていない職業は女性には適していない」と述べ、当時の法体制に賛成の立場をとっている点はアンチフェミニスト的な姿勢といえるだろう。サンドはまた、女性が男性に劣る要因は、教育の欠如と女性自身の性格にあるとしている。そして教育はまだしも、女性の性格は後天的に作られるものではなく、換言すれば、自然の身体に根ざしたものであるために永遠に変化しないと述べている⁴⁹⁾。

しかし、だからといって、サンドはナポレオンやルソーのように女は男に従い、男を慰める存在でなければならないと言っているわけではない。また、サンドの諸作品で検討してきたように「男女平等の教育は禁じられるであろう」とするルソーの結論とは相容れないジェンダー思想をサンドがもっていたことに疑いの余地はない。

では、女性の知性は男性より劣るのではないとしながら、身体の格差が性

48) *Lettres à Marcie*, op. cit., p. 197.

49) 男女には性差があるとするサンドの理念は、「教育の進歩がどうであれ、女性は男性と異なる。心も精神にも性がある」と述べる『わが生涯の記』(1854)においても示されている。(*Euvres autobiographiques*, op. cit., t. II, p. 127.

格にまで及んでいると捉えるこの時点のサンドの考えは、どこからきているのだろうか。サンドには常に公私の別を明確にしたいとする強い願望があった。公の場ではジョルジュ・サンドという男性名の筆名を使い、私生活では祖先から継承してつけられた名前の「オーロール」としかショパンに呼ばせなかったことも、公的生活は男性のように、私生活は女性として生きたいサンドの意志の現れと解釈しうるだろう。この問題はサンド自身のアイデンティティに深く関わる問題であり、自らの性に関し、サンドが場合に依じて「男」「女」「どちらでもない」と両義的な発言を繰り返してきたことにも結びつく⁵⁰⁾。

自分の原稿を掲載してくれる宗教家ラムネーへのサンドの遠慮が多少なりともあったと推察されるにしても、少なくともサンドが女子教育の問題は別とし、男女のセクシュアリティについては、今日の進歩的なジェンダー理念からは遠いと思われる独自のジェンダー思想をもっていた。したがって、『マルシーへの手紙』は、これまでに主張されてきたように、今日的な意味でのフェミニスト的な主張一辺倒で貫かれているわけではないのである。

では、サンドにはなぜ誤解を与えるような両義性が時として存在するのだろうか。ひとつには、ドーミエのカリカチュアが赤裸々に描いているように、女性がものを書くことが男性の恨みを買った、女性作家にとって極めて厳し

50) サンドには男性的な側面と女性的な側面があり、周囲の人々は困惑したという。“Prenez-moi donc pour un homme ou pour une femme, comme vous voudrez. Duteil dit que je suis ni l’un, ni l’autre, que (je) suis un être.(...) Quoiqu’il en soit, prenez-moi pour une amie, frère et soeur à la fois. Frère pour vous rendre des services qu’un homme pourrait vous rendre, soeur pour écouter et comprendre les délicatesses de votre coeur”. Lettre de George Sand, Le 6 mai, 1835. *Correspondance*, t. II, p. 879–880.

こうしたサンドの「性」に関し、バルザックはハンスカ夫人宛ての手紙の中で「サンドは男だ」と述べ、フロベールは「第三の性のあなたよ」とサンド宛ての書簡に書き記している。“Mais cependant, quelle idée avez-vous donc des femmes, ô vous qui êtes du Troisième Sexe ?”, *Correspondance Gustave Flaubert / George Sand*, édition d’Alphonse Jacobs, Paris, Flammarion, 1981, p. 196, lettre du 19 septembre 1868.

い二世紀前のフランス社会の現実と大きな関わりがあると思われる⁵¹⁾。世間のしきたりや常識を大きく逸脱した、しかも売れ行きのよい作品を次々と出版する孤独な女性作家は、そのたびにあらゆる批判に晒され罵詈雑言を浴びた⁵²⁾。その自己弁護をし世論に理解してもらえるようにと、サンドは自らのほとんどすべての作品に対し、後年になって序文を書き加え、読者の理解に訴えている⁵³⁾。

階級であれ、出自であれ、年齢差であれ、対立する二つのものが融合し、知恵を集めて作り上げた新たなユートピアの世界を描くのがサンドの創作手法の特色であったが、サンドは何よりも作家であり、音楽の深い素養を持ち、後年には自ら絵筆をとってダンドリッド手法という新しい画法で風景画を描く芸術家でもあった。常に芸術を志向し理想を描くサンドにとって現実に拘泥することは芸術や創作の世界から遠ざかることになる。フェミニスト運動が現実であり創作活動が芸術に喩えられるとするなら、生活の資を得るためにフィクションの世界に生きる創作者にとっては、現実に対するステイタスを両義的に解釈されるよう自らを演出したいという潜在的な願望もあったのではないか。作家は現実の境界線を越え、フィクションと芸術的な空想の世界へと移動する。『十九世紀ラルース事典』が作家サンドを形容し、サンド自身もしばしば自らをなぞらえた「鳥」のように、作家は創造の世界を自由に飛翔する。サンドの小説には変装し男装するヒロインが数多く登場するが、小説『レリヤ』『アンディヤナ』『マテア』『ガブリエル』『コンスエロ』のヒロインたちは、異性装を纏い、鳥に象徴される自由なイメージのように、閉じ込められた時空間から彼女たちに禁じられた時空間に移動し、新たな広大なフィクションの世界を経験する。サンドは異性装という固有の文学手法を駆使することによりヒロインの移動を可能にさせ、現実をフィクションの物

51) Catherine Camboulives, Frédérique Barret, Musée d'art et d'histoire, *Daumier, Scènes de la vie conjugale*, Musée d'art et d'histoire, 1988. 林田遼右, 『カリカチュアの世紀』, 白水社, 1998。

52) 最も有名な例がボードレールである。

53) Anna Szabó, *Préfaces de George Sand*, Debrecen (Hongrie), Kossuth Lajos tudományegyetem, 1978.

語に変容させてしまうが、この現実とフィクションの往来こそが、すでにサンドという作家につきものの生来の両義性と捉え得るのである。換言すれば、サンドの現実の人生自体がフィクションであり、創造と想像の世界であったのである。

* * *

サンドが世の人々や読者に強いジェンダー的な影響を与えたのは、何よりもサンドの世の中の偏見にとらわれない芸術的で自由な生き方が女性たちが理想とするモデルとなったことであった。とりわけ、サンドには女性の現実をフィクションという鏡に説得力ある形で映し出すことを可能にさせる才能と筆力があつた。19世紀とは、たとえ書くことが許されたとしても女性作家はセンチメンタルなラブ・ロマンスを書くものとされており、男性作家の占める文学学会から排除されていた時代であった。そのような女性差別の時代にあつてサンドはフェミニスト運動家としての行動を起こすことはなかったが、その作品は19世紀の男性作家を凌ぐほど強い影響力をもつた⁵⁴⁾。サンドの小説世界は、様々な偏見や常識の境界をやすやすと越えてしまうものであり、そこでは異性装が頻繁に登場し、男か女かといった女性のセクシュアリティとアイデンティティが問題となっている。このように一般世間の性に関する常識や伝統あるいは根強い偏見が画した境界線を激しく揺るがす

54) サンドは、女性であっても結婚し子供をもつ職業人として成功しうるのであるという極めて現代的な女性のモデルを世に示し、女性たちに勇気と希望を与えた。チュニジアの現代女性作家エレ・ベジ Hélé Beji が「サンドはポーヴォワールより遙かに現代的な女性作家である」と述べる所以である：<http://www.rafikdarragi.com/textes/retour.htm> サンドが人生の伴侶とした恋人たちの殆どは年下で病弱の男たちや芸術家であり、そうでなければサンド自身のように芸術家気質の男たちであった。サンドは、彼らの生活費や高額な医療費、彼らに快適な仕事場を提供するためのアトリエの増改築から楽器や画材の費用、時には酒屋のつけや借金まで負担し、彼らの面倒をみた。一般に母性愛とよばれる大らかな愛情はサンドに生来のものではあつたが、サンドは男が外で稼ぎ女は家庭を担うとする近代社会が構築した家族モデルとは正反対のモデルを自らの生き方をもって提示したのである。

ような多くの作品を創作したサンドは、読者の潜在意識に働きかけ新たな感動と思考を誘うという意味で極めて現代的な作家である。運動家でも理論家でもないサンドは、いかなる団体にも所属することはなかった。しかし、少なくとも確かなことは、サンドという作家は、女性に対してなされている不正を人々に理解させ、法の不備を訴え、女性たちの隠されていて明るみに出ない性の問題を大胆果敢にフィクションを通して描いて見せた。そこには『イジドラ』のなかでサンドが強調した女性と貧者の相似論にもみられるように⁵⁵⁾、男性作家には書けないことを女性のために描くのだと決意した女性作家サンドの強い意志と使命感が表明されている⁵⁶⁾。

サンドの女性思想に両義性が認められるとはいえ、果敢な人生を生きた作家サンドは、二世紀も前に現代女性の抱える問題を反映させた作品を書き、後世の女性解放を予告した。その文学的戦いは女性のみならず人類総体に及ぶものであった。サンドが「19世紀の燈台」と呼ばれる作家のひとりであることは、言を俟たない。

55) “Il y a de mystérieuses et profondes affinités entre ces deux êtres, le pauvre et la femme. La femme est pauvre sous le régime d’une communauté dont son mari est chef ; le pauvre est femme, puisque l’enseignement, le développement, est refusé à son intelligence, et que le coeur seul vit en lui”. *Isidora*, éditions Des femmes, 1999. p. 89.

56) “Les femmes ne comptent ni dans l’ordre social ni dans l’ordre moral. Oh! J’en fais serment et voilà la première lueur de courage et d’ambition de ma vie. Je soulèverai la femme de son abjection, et dans ma personne et dans mes écrits, Dieu m’aidera”. *Correspondance*, Garnier, t. IV. p. 18.